

1988年度上半期 報告書

目次

(Pの後の数字は原本の頁)

大山ハイキング	P1
尾瀬南会津山スキー	P1
新入生歓迎公開山行	P4
G.W.山行一槍ヶ岳北鎌尾根	P5
雪上訓練合宿	P7
針葉樹会懇親山行	P9
岩登り合宿	P10
岩登り救助訓練	P10
夏合宿	P11
北ア鹿島槍ヶ岳北壁主稜	P16
南ア甲斐駒ヶ岳赤石沢前衛壁Aフランケ	P16
富士吉田口	P17
奥秩父縦走&小川山フリー・クライミング	P18
東北周遊	P18
黒部三部作	P19
Free Talk	P21
ボルトをボトルに持ちかえて		
ーボルトをめぐる断章ー		
特別寄稿	Yosemite Diary '88 P23

(電子化註)

- 1) 英数字は半角で統一(但し、地名、固有名詞の英数字は全角)
- 2) 槍ヶ岳、甲斐駒ヶ岳・・・ → 槍ヶ岳、甲斐駒ヶ岳・・・ 々に統一
- 3) 天気記号は○(快晴)、◎(曇)、●(雨)以外は漢字名に変換した。
- 4) 不明文字は*(全角)、*(半角)とし、背景を濃桃色とした。
- 5) 電子化作業にて挿入した文章は斜線とした。

1. 大山ハイキング

4月2日 ◎

丹沢・大山

参加者メンバー 井上、花田真樹子(♀)、五嶋みよ子(通称”おみよ“)

「連れてけ」と言われ、Gパン姿で大山へ行ったが、頂上付近は大量の雪でびっくりした。寒い頂

上ですかさずレモンティーを沸かし、山岳部の面目を保つ。

(文責 井上)

「4月2日に、井上君の指導のもとに大山ハイキングに行きました。大山なんて山は、上の方まで階段になっていて、チョロイ山だと思っていましたが、数日前に降った雪が積もり、靴の裏側がつるつるだった私は、3歩進んで2歩すべるといってきわめて悲惨な状況の下での登山を強いられることになりました。荷物は井上君に全てもたせ、おみよにおしりを支えられ、井上君に手をひっぱってもらい、私は文字通り2人の“おにもつ”となってしまったのであります。Butそれだけに思い出深いものがあつたので、おにもつとなろうとも、素敵な井上君(?)の指導の下で、わらじをはいて沢登りに行くことを夢みております。

(by Yuki)

2. 尾瀬・南会津山スキー

9日 ○ 戸倉 10:55 ~ 鳩待峠 14:50 ~ 山ノ鼻 16:50

山スキーへの志向をもっているのは私一人なのであろうか？ 同行者が得られず、半分やけになって、山スキー単独行を試みる。めざすは格好のスキーフィールド尾瀬(といってもシーズンにはまだはやいのだが)と静寂なる南会津の盟主駒ヶ岳を結ぶコースである。

朝一番の西武新宿線の電車で出発。大学生4年目の私には信じがたいことであるが、都心に向かう電車は始発から満員である。身分不相応にも新特急谷川1号で沼田へ。そこからバスで戸倉へ向かう。戸倉には 10:30 ごろ到着。すぐに出発。戸倉スキー場は、プレ冬合宿でスキーの練習を行なったところであるが、今はすっかり雪も無くなっている。このふんだと鳩待までの林道も雪なしか、と思ったがそれは甘かった。出発から1時間ぐらいのところからスキーを付けて歩く。やはり単独行は心細く、何度か出掛けてきたことを後悔する。鳩待峠到着は 14:50。ここから山ノ鼻まではおおむね下りである。山ノ鼻に到着したのは 16:50。結構時間がかかったものだ。

10日 晴 山ノ鼻 5:35~尾瀬ヶ原~見晴 7:25~燧ヶ岳頂上 13:25~御池~七入登山口 18:10

狭いツェルトを抜け出してみると、辺りは早々と明るくなりかけていた。早速出発。西に至仏山のシルエットがなだらかなスロープを描いてやさしく浮かび上がり、それと対峙して東には、目指す燧ヶ岳がどっしり構えている。そして広大な尾瀬ヶ原には、もちろん、私以外には人影はない。静かである。ダイヤモンドダストと呼ぶのであろうか？ 空気中の水分が氷化したものが太陽光線を浴びてキラキラと輝いている。尾瀬ヶ原は最近すっかり観光地化されて、シーズンには観光客が“渋滞”することがあるという。しかし、私は今、シーズン中では味わえないであろう神秘的な尾瀬の雰囲気一人で満喫している。それだけでも出てきた価値はあるというものであろう。ただひとつの悩みは、沢にかかる橋が撤去されているということである。橋の鉄骨はあるがその上に並べる板が取り払われているため、仕方なくスキーを外し、鉄骨の上を綱渡りのようにして渡る。まったく荒らされていない新雪にシュプールをしるして、2時間後には、尾瀬ヶ原を通過、燧ヶ岳の麓見晴に到着。

ここから燧へはおおむね夏道通しに進む。徐々に傾斜がきつくなり、スピードは低下する。頂上直下には、赤ナグレ岳を越してから北上して燧の頂上へ向かうべく進路を取る。夏道は*安ぐらを通っているが、コルからの雪崩を警戒したためである。頂上直下が、傾斜もきつく、異様にしんどかった。(スキーは外した) 時間も予定を大きく上回る。やっとの思いで頂上につくと、まさかと思ったのだが社会人パーティーに出会った。やはりスキーを使い、御池から登り、往路を引き返し、今日のうちに檜枝岐に下るといふ。私も彼らに続き、勇んで滑降を開始したものの、何を隠そう私は滑降が苦手である。先行パーティーは早々と私の視界から消え去り、後には彼らのシュプール(そのうち一部は大胆にも急斜面にしろされている)が忌まわしげに残っているのみである。雑誌記事の参考タイムをも大幅に上回る。スキーの滑降では、その人の技術、その他の条件により、所要時間が非常に大きく異なってしまう。プランニングの際には十分な注意が必要だ。燧ヶ岳の北面は、特に中腹は、たしかにスキーヤー好みのルートであり、快適に滑る。しかし、広沢田代より下は、樹林帯であり、ブナの木の間をさながら回転競技のごとく小刻みに滑り抜けるテクニクが要求される。(傾斜もかなりある)

悪戦苦闘の末御池に下りてきたところで、ミスをやらかしてしまった。予定では今夜はここに泊まり、翌日大杉岳から会津駒ヶ岳へ向かう予定であったが、なんとすっかり御池を通過してしまい、檜枝岐方面の林道に入ってしまったのである。仕方なく、翌日は七入から稜線に上がって駒ヶ岳を目指すこととする。ブナ平らを走る林道は今、除雪作業の途中であるが、あと半月もすれば、ここは尾瀬へ向かう観光客を満載したバスが走ることになる。

11日 ○ 七入 5:08～送電線監視小屋～大津岐峠 10:00～駒ノ小屋 11:43～会津駒ヶ岳 12:28
～檜枝岐 15:18

七入へ落ちている尾根(送電線が走っている)をアイゼンで登る。しかし 2 時間くらいするとアイゼンではもぐるようになり、スキーに付け替える。約 3 時間半で稜線に上がる。稜線に上がってしまえば、スキー向きの地形だ。今日も快晴。風もなく、降り注ぐ陽光。見渡すかぎり、山岳重畳と形容される南会津のやまなみが続く。時折、銀山湖が顔を見せる。快適そのもの、と言いたいところだが、私の使っているモヘアシールは、このようなときには雪がついてしまうのである。休憩時間の度にスキーを外してシールを乾かさなければならない。駒ノ小屋手前すなわちカワイゴイワ沢の源流付近は、雪庇に注意。その他には技術的に問題になるところはなからう。

駒ノ小屋に荷物をデポし、駒ヶ岳頂上を往復する。駒ヶ岳の頂上には、頂上を示すものが何も無い。地図と何度も照合し、本当に頂上であることを確認する。北方には、会津朝日岳にまでつながる稜線が続く。しまし道はない。駒～朝日を縦走するには、現状では残雪期にスキーを用いてやりのが唯一の方法であろう。頂上からの滑降は、荷物を背負っていないので、実に快適。

当初の計画では、駒ヶ岳の先の大戸沢岳まで足をのばし、そこから嫁郷へ滑り降りる予定であったが、地図から自分の実力以上であると判断。まっすぐ檜枝岐に下りることにする。駒ヶ岳から檜枝岐に滑り下りるルートは、かなりポピュラーであるらしく、要所には赤布がついている。しかし例によって滑降には難渋を極め、自分のスキー技術はまだまだであることを実慮させられる。

15:18 檜枝岐の登山口に到着。自分の辿ったコースを振り返り、しばし至福を味わう。

山間に一本の道が通り、人びとが生活する人里が、単独行の後にはどれほど懐かしく感じられることか。檜枝岐の春は遅い。米の実らぬこの地にも、人びとの生活は根付いている。その檜枝岐も、最近はずっかり交通の便が良くなった。野岩鉄道＝会津鬼怒川線の開通である。午後 6 時すぎに会津高原を発てば、10 時すぎには東京へ着けるとするのは、何か信じられない気がする。これまであまり顧みられなかった会津駒ヶ岳も、特に山スキーをやる者には、「近くて良い山」とも言える存在になったのではあるまいか。忘れ得ぬ想出を胸に、私はここ南会津を去る。やがて会津鬼怒川線の二両編成の電車は、すっかり夕闇に包まれた南会津の山々の間に消えていった。

(文責 小野)

3. 新入生歓迎公開山行(奥多摩・御前山)

4 月 29 日～30 日(5 月 1 日は上級生岩登り)

参加メンバー:小野、井上、細野、内藤、

新人:柴田、坪井、岩原、信太

29 日 ◎ときどき○ 奥多摩湖～御前山

朝 8 時に立川駅ホームに集合する。新人 4 名の参加者が集まった。昨夜 OB と“みね”で飲んでベロベロになっていた井上氏は、そのままホームで口を開けたまま熟睡の様子。彼を囲んで出発記念撮影を行う。

電車で揺られること約 1 時間。東京都は信じ難いド田舎奥多摩駅に着く。ジン、いいちこを大量に仕入れし、そそくさとバスで奥多摩へ。奥多摩湖をバックに記念撮影。

小雨の中、ジンを回し飲みしながら、ひたすら大ブナ尾根を登り進む。頂上に近付くにつれ泥の悪道で、転倒するもの続出する。誰一人としてお尻が白い者はいなかった。途中、下山するオバサンたちに遭遇。

御前山に着く。中は意外と小綺麗。まず靴や服に着いている泥を落として、さっそく豚汁を上級生が作る。バラ肉たっぷり健康によい薄味。新入生たちにとって、まさにこの山行の幸福の極致を味わえたひと時であった。

夜も深まり、いよいよ酒の宴へと進み、ありとあらゆる酒が次々と部員を飲み込んでいく。楽しい歌声(?)が夜通し山中にこだましていた。

30 日 ○ 御前山～御前山登山口(坪井、柴田、信太は帰京)～つづら岩(テント泊)

朝 7:00 起床。昨夜のアルコールとゲ○の臭いの漂う小屋を後にする。T 新入生は、ビール樽イッキの後遺症で、歩いてはいるものの無我の境地に達していた。

富士山の雄姿が拝める湯久保尾根にて記念撮影。その後晴天の下、快適な下山が続く。御前山登山道入口のバス停よりバスで武蔵五日市へ。上級生と新入生一人(岩原)がつづら岩登攀のため入山。滝で、保有していた肉が犬に食われる。(この日で新歓山行終了)

1日 ◎ つづら岩登攀

快適なクライミング。初めて岩登りに挑んだ一人の新入生の絶叫がつづら岩に響く。夕方下山し、五日市駅前で一升びん純米酒を囲み、山行の無事終了を祝す。

山行成果

この山行の目的は、率直に言えば山岳部員の新人獲得にあるわけであるが。それとは別の意味で非常に楽しい山行であった。しかしながら、今回参加した一年生から、現在 2 名の部員が活躍するにいたったことは、少なからずもこの山行の真も目的に達したことを示すのであろうか。ただ我々山岳部にとって、部員不足は常に深刻な問題であることは、悲しい現実である。

(文責 岩原)

※「御前山周辺概念図」省略

4. G.W.山行 槍ヶ岳北鎌尾根

5月3日～6日

参加メンバー 小野、井上、引地(OB)

3日 ○⇒◎⇒● 七倉 6:30～高瀬ダム下 7:20～湯俣 10:40～千天出合(TS) 13:10

5/2 深夜の夜行で出発したが、小野、井上は、鹿島槍の北壁に行く鮎沢、浅沼両氏(彼らの山行は別記)と一緒にコンパートメント(引地 OB は別の車両)になり、ひんしゆくを売る乗客を横目に、延々と酒宴を行う。翌日信濃大町で降り、ただの酔っ払いと化し行く末の危ぶまれる両氏に別れを告げ(置いて行き)、タクシーで七倉へ。小野、井上は寝不足と宿酔で、一本取るごとに寸暇を惜しんで睡眠をとる。湯俣までは、猿の群れやボケたカモシカを見た。ルート・ファインディングを誤ると渡渉を余儀なくされというアプローチは、壊れかけた吊橋の通過もあったが、それ程の問題もなく終わる。千天出合で早々とテントを張るが、テントに入ると雨が降り出し、正しい判断を喜ぶ。

4日 ●⇒◎ TS11:10～P2手前コル 13:00

朝は雨だったので行動を控えたが、止んだので元気を出して出発。急登をあえぐ。P2手前のコルで、天気を良くないので進むかどうか迷う、井上が「稜線で雷に会うのはコワイです」と進言すると、引地 OB が「いいコトを言うねエー」とのたまわれ、日和って幕営。

5日 晴ときどき◎ TS5:05～北鎌沢コル 7:10～独標通過～北鎌平 11:00～槍頂上 12:30～

槍沢ロッジ 14:45～横尾 16:25

七倉では「すでに、100 人くらい入山している」と言われただけあって、G.W.の北鎌は、所々滑落の恐れはあったものの、トレールがぼつちりついた楽しい稜線散歩になる。どんどん進んで頂上手前で1Pザイルを出し(ちなみに引地 OB はザイルで先に頂上に行ってしまった)、子供の日の昼過ぎ、までたく全員登頂となる。当初、「このまま穂高まで縦走して、滝谷の一本でも…」と気合の入っていた引地 OB も、「トレーニングもしていないし、ぼくなんかこのくらいの規模の山行が丁度やね」、とか「常に我々は日和るなあ」とおっしゃり、晴れ上がった空の下、全員で槍沢を下降、ルン

ルン気分一路横尾へ。

6日 ○ TS9:05～上高地 11:45

この日もよく晴れ、上高地までは穂高の山々がよく眺められた。松本では、山行の労をねぎらいおいしい食事をとり、引地 OB は暑いといって涼しげなズボンを購入、コフックを中国製のペタペタの靴にはき替え、山帰りとは思えぬ格好で初夏の陽射しを楽しんでいた。 (文責 井上)

5. 雪上訓練合宿

5月31日～6月5日

南アルプス 大樺沢

参加メンバー (先発)小野、内藤、岩原、(後発)井上、細野

31日 晴 6:30 甲府駅発(バス) ～7:27 夜叉神峠着～(以下徒歩)～

南ア・スーパー林道～広河原 11:55～大樺沢二俣手前(幕営、定着)

昨夜はゆっくり甲府の駅で寝ることでできた。しかし駅の3分毎にキンコン鳴るベルは、なんとかしてほしいものである。7時半ごろ夜叉神峠に着き、適当に歩き始める。南アルプスが初めての私は、この深いあおい緑と豊かな水に感動してしまう。こういう所を女の子とドライブしたら最高だな、と思ったりする。岩原は先々日トレーニングで痛めた足が痛そうである。それでも4ピッチで広河原に着いてしまった。ここで私と岩原は山靴にはきかえ、大樺沢を登っていく。岩原の足はますますひどく、なかなか進まない。15時ごろ、右俣と左俣の分岐点の手前20分くらいの所にテントを張ることにする。今日の予定では雪訓を少しするはずであったが、時間は遅いのでやめにする。

1日 ◎ときどき● 時間等は記録がないので不明

今日は雪上歩行とピッケルストップの練習をする。雪の状態が悪く、あまりピッケルストップで止まらない。キックステップで雪上歩行では、小野と内藤のやり方が食い違い、一年生の岩原戸惑う。3時ごろ帰幕。そして17:10ごろ、後発隊である井上と細野が到着。

2日 ◎ときどき●、ガス

3:30 起床 5:25 出発 7:00 雪上訓、それぞれやってみた結果練(歩行、ピッケルストップ、アポロ、スタカット、搬送) 12:45 帰幕

雪上歩行では、細野が小野の誤りを指摘するが、受け付けられず、後日帰京してからの課題となる。またスタンディングアックスビレイでは、井上と内藤のやり方が食い違い、それぞれやってみた結果、井上の間違いが判明する。また搬送訓練では、搬送されるに人間でなく荷物を使ったため。あまりリアリティーのない搬送訓練となった。

3日 ●ッ、二つ玉低気圧

3:30 起床。すぐまた眠る(雨強しのため) 7:00 再び起床 9:10 天気図より沈と決定

10:10 細野、帰京のため出発 10:50 細野、帰幕

朝起きると非常に雨が強く、天気の回復を待ちながら眠る。9:10 には天気図から沈と決定。細野は急用のため今日の訓練が終わると帰京することになっていたため、今日が沈と決まったので、帰ることになる。10:10 細野出発するが、10:50 テントに戻ってくる。広河原への大樺沢の道は、上から落石が多く、危険が多いためということである。

4 日 ●のち晴

4:00 起床、特機 6:00 出発決定 6:55 出発～7:35 二俣～8:15 御池小屋～12:10 北岳頂上～
16:05 御池小屋～20:45 広河原

朝起きると夜からの雨がまだ続いている。今日は後半縦走に出発の予定であったが、縦走路に沢があり、増水時には危険とガイドブックに書いてある事、岩原の足の調子が悪いなどから、縦走は中止と決定する。6:00 ごろには雨も止み、荷物をまとめて出発することにする。御池小屋(道が荒れているため大樺沢のルートはとらなかった)に着いたあたりから晴れ始め、北岳アタックをすることにする。12:10 頂上に着く。帰りには、雪は焼く溪を、岩原を確保しながらグリセードで降ろしてあげる。16:00 ごろ御池小屋に着き、そこから内藤は、帰りのタクシーを呼びに行くため一足先早く下り、小野と井上は岩原に付き添ってゆっくり下ることになる。なお細野は北岳アタックをせずに先に帰京。17:50 内藤、広河原に到着。タクシーを呼んでもらおうと山荘に行くが、ここではtelはなく。タクシーは呼べないとのこと。20:45 小野、井上、岩原、広河原に着き、ここで幕営。

5 日 晴

天気はこれまでとうって変ってド快晴。こんなことになるのであれば、今日岩登りに行くべきであった。と悔やむ。太陽が眩しい。こんな美しい景色と朝早く別れるのも名残惜しいが、8:00 バスにて帰る。

全体を通しての反省

まず問題となるのは、雪上訓練とスタンディングアタックビレイの間違いである。これらは部会において、レジュメをもって全員で勉強会を開いているのに、である。これらは、勉強会において、上級生がきちんと身を入れて勉強せず、ただ一年生のための勉強会と思い、レジュメの内容を聞き流しているところに問題があると思われる。またルートの勉強についても不十分で、たまたま一年生がガイドブックを持って来ていたからよかったものの、それがなければ増水し危険があるとさえ書かれている沢に行くことになっていたかもしれないのである。全体を通して言えるのは、「一年生のための訓練合宿だ」という甘さが我々上級生にあったのではないだろうか? (文責 内藤)

6. 針葉樹会懇親山行(OB 山行)

5 月 14 日～15 日 (晴～◎)

場所 安達太良山

現役からは井上、細野の 2 名が参加

小屋泊りのルンルン山行。14日は引地OB、斎藤OB、および井上(現役)は一足先に入山し、胎内岩を登攀。井上がリードするが、ランナウトしながら濡れ濡れのチムニーを登り、5月の東北の岩も冷たく、コワイ思いもした。15日は全員で縦走。頂上で御歳八十?歳の近藤恒雄大OBのザックから、缶ビールおよびガラスのコップが出てきたのには、誰もがびっくりした。

(文責 井上)

7. 学生部小川山集会

(山行日不明)

参加メンバー 井上、内藤

前夜、日本山岳会の学生部に集まり、車で出発する。私(内藤)は法政の松原さんや早稲田の遠藤さんらと同じ車となり、おもしろい話がたくさん聞けて非常に楽しかった。1日目は、まずコンペが行われ、私は日頃の行いの良さか、なんかの賞をもらってしまいました。その後のコンパは花火を振り回わしていた〇〇大のOBの焦点の定まらない目が印象的であった。翌日は、岩登り救助講習会。朝突然、I沢さんが現れる。何でも一晩中歩いてここまで来たとのこと。I沢さんのパワーには、おそれいる。I沢さんは岩登りへ、井上と内藤は講習会へ行く。有意義な講習会であった。(文責 内藤)

8. 丹沢・水無川源次郎沢遡行

参加メンバー:小野、坪井

6月18日 ◎

大倉 8:30~戸沢山荘 9:50~遡行開始 10:30~稜線 12:30~塔ノ岳 13:10~大倉 15:30

今日は坪井の沢登り初体験である。源次郎沢は大きな滝もなく、入門用には最適な沢である。ただ出合がわかりにくい。源次郎尾根に上がる登山道をしばらくたどって、堰堤を越した辺りで沢に下りる。沢のそのものは快適。1時間あまりで水が涸れてしまう。あとはガレをつめるが、源頭付近の岩は脆く、落石に注意。塔ノ岳に上がったときに、一面霧に包まれていて、視界がきかなかったのは残念。下降は大倉尾根をとる。(文責 小野)

9. 岩登り合宿(三ツ峠)

7月1日(◎のち●)、2日(●、◎)、3日(●、◎)

参加メンバー:小野、井上、細野、岩原、坪井

毎年梅雨の合間をついて行われる岩登り合宿で、今年も不快な天気が続く中、人工登攀などを混じえて岩を登った。ただし救助訓練は別の機会に行うことにしたので、上級生にとっては「テーマが無い」との声もあった。下級生にとっては岩登りおよび生活技術の習得がテーマとなった。一年生は、岩においてはコールおよびその確認をしっかりすべきであったし、生活においてきびきび

と動くように、との反省が出た。また坪井君にとっては最初の合宿であったのでムリもない。それから岩原君の手の込んだ食事は大好評であったが、井上が入山した時に、皆が楽しみにしていた鳥の腿肉が全て骨だけになっていた(“lost chicken”ことは、大きな汚点としてつよく非難を受けるべきであろう。(文責 井上)

10. 岩登り救助訓練

(山行日不明)

日和田山

参加メンバー 小野、井上、細野、内藤、坪井

都岳連の講習を受けてきた井上と内藤が軸となって、岩登りの救助訓練を行なった。自己脱出、宙づりになった岩の救助、3 人一組での事故者の引きおろし、プルーミック登攀など、昨年に比べるとかなり充実した訓練であったと思う。ただ残念なのは、かんじんの一年生が一人欠席したことである。(文責 内藤)

11. 夏合宿

8 月 2 日～13 日

北アルプス剣岳・真砂沢定着

参加メンバー:小野(CL)、井上(SL)、細野、岩原、坪井

なお記録係だった細野君の残した記録の断片には、天候に関する記述がないので、ここでは省略した。

2 日 室堂 9:00～別山乗越 13:00～剣沢 14:15～真砂沢(BC) 18:00

昨夜の夜行「能登」では、多くの知り合いと一緒に上、見知らぬお姉さんと意気投合し、high になった我々は大騒ぎをして他の乗客に大ひんしゆくを買う。(思い出すと冷汗が出る) そのためおおいに酩酊して、出発が大幅に遅れる。重荷、靴擦れのため一年生の歩*が遅れ、真砂沢BCに着くのは日暮れ前になる。

3 日 TS6:00 平蔵谷にて雪訓(歩行、滑落停止、ザイルワーク少々) 帰幕 17:20

雪訓第 1 日目。一年生はピッケルストップがうまくできず、それにかなりの時間を食い、帰幕も意外に遅くなってしまった。できればザイルワークまでしたかったのだが・・・。

4 日 TS5:15～平蔵のコル 8:52～剣岳山頂 9:53～長次郎左俣コル 11:00～B.C.14:15

一年生兩名とも、靴擦れのなどのためか歩くのがのろい。長次郎雪渓下降は、はじめてのところは急傾斜で恐いので、一年生はスタカットで下ろす。帰路、熊ノ岩付近でピッケルストップの補

習。

5日 TS4:30～平蔵の科尔 7:50～早月尾根分岐点 8:20～ 2800m 地点 10:47
～早月小屋TS13:00

6日 早月小屋 5:10～剣岳頂上 9:30～長次郎谷～TS14:00

この両日は小縦走で、早月尾根下降～馬場島～滝ノ谷～剣尾根を予定していた。長い行程を想定して早立ちしたが、一年生の調子が思わしくなく、特に岩原が格段に遅れ、予定の小窓乗越越えはおろか馬場島までも行けそうにないので、小縦走を断念し、早月小屋にツェルトを張る。一年生の力量を考慮せず予定をたてたのが悪かったのか??? 翌日は帰るだけで、二度目も本峰登頂の後長次郎谷を下降。この時も雪渓上部ではスタカットをする。時間に余裕があったので、雪渓下部で搬送訓練を行う。真砂沢に帰ると鮎沢が到着していた。彼は 5 日に真砂沢に入り、6 日はどんぐり第一ルートを単独登攀している。

7日 [小野、井上、細野] チンネ左稜線登攀

TS4:30～長次郎谷登高～池ノ谷乗越 6:32～三ノ窓 7:09～チンネ左稜線取付 8:00～

終了 13:00～VIIⅧの科尔 14:00～VⅥの科尔 15:00～TS16:00

[鮎沢、坪井] ハツ峰Ⅵ峰Cフェース剣稜会ルート

[岩原] 休養

上級生はチンネの登攀を主なう。左稜線は取り付きを探すのに時間がかかり、雷がいつ起こるかとおびえながら登っていたので、快適さを満喫できずじまいの慌ただしい登攀となった。(実際は雷など起こらなかったが) 帰路、三ノ窓側を歩き長次郎谷へ出ようとしたが下りる所がなく、ハツ峰上半を逆縦走してVⅥの科尔まで行った。精神的に異常に疲れた。

坪井は元気だったので、鮎沢と一緒に初の本チャンに挑戦、剣稜会ルートの迫力を味わう。岩原は足の回復を待つため休養。

その日、ラジオが壊れ、学習院大に天気図を見せてもらう。おまけに翌日から縦走に行くということで、「余ったから」とお米までもらってしまった。そのお礼代わりに、真砂の舞台で芸を披露。坪井、岩原、井上、鮎沢のハリキリの甲斐あってか、学習院大からズブロッカを頂く。ウレP!!

8日 全員休養 鮎沢奥鐘山へ出発

9日 TS4:15～IⅡ峰間ルンゼ出合 5:15～IⅡの科尔～ハツ峰I峰 7:13～

IVⅤの科尔 8:30～VⅥの科尔 10:15

この日はハツ峰上半下半を縦走する予定であった。ところがVⅥの科尔で雷の不安があったため行こかもどろか判断に迷っていたところ、突然一年の岩原が足を抱えて「イテテテテ」、「足が痛エーよー」とぬかす。あまりにグッド・タイミングであったため。その行為は誰言うとなく「岩原のサル芝居」により我々は日和って上半をカットし、陽なたぼっこをしながらゆるゆるとTSに帰ることになった。

10日 TS4:10～源治郎尾根取り付き 5:10～1P fix～稜線 7:52～I峰 8:50～

アプザイレンの科尔 9:45 (この先2隊に別れる)

[本峰北壁L2隊(井上、坪井)] [本峰南壁A1隊(小野、細野、岩原)]

～長次郎谷下降～TS

源治郎尾根ではルンゼ沿いにルートをとって、1P fixする。アップザイレンのコルにおいて天候は◎
●でときどき●もあり、風もあってかなり寒い。岩登りを中止して帰幕すべきか考える。昨日日和つたことを思うにまたも投げ出すのも後ろめたく、両パーティーとも岩登りを敢行することにした。北壁隊はシュルンドの処理にてこずりさらに視界もあまり良くなく、岩は濡れ風も強いので、かなりしんどい登攀になったが、充実感もひとしおであった。南壁隊は、脆い岩に悩まされ長くかかったが、無事登攀する。

11日 TS5:30～VI峰フェース取り付き 7:00～

[魚津高隊(小野、井上、坪井)] [RCC隊(細野、岩原)] ～VI峰の頭 11:30

～VII/VIIIアップザイレン 12:30～池ノ谷乗越 13:10～長次郎谷下降～TS14:30

朝の出発が毎日のように遅れ、この日も、遅れないようにと何度も一年生に注意していたにもかかわらず、またも彼らはのろのろして出発時刻が大幅に遅れる。そのため井上が怒って猛スピードで歩き、ついてこれない一年生を怒鳴る。上記の2隊に分かれ、岩登りの後VI峰の頭で待ち合わせる。魚津高隊が遅れること1時間で2隊は合流。ハツ峰上半の縦走に向かう。快適な稜線歩き。

12日 細野君遭難事故発生。詳細は別途発行の「仮報告書」を参照。

(文責 井上)

夏合宿の反省(8/29の反省会記録をもとに編集)

今回の遭難事故の反省において、各合宿の反省がその場限りで終わってしまい、次の山行に活かされていないのでは、という指摘があった、そのことを克服するために、今後、各合宿の反省会事項を整理し、「報告書」に記載することにした。

[入山] 「もっと根性を出すべきだった」「バテました」という一年生の反省にもあるとおり、今年に入山に異常なほど長時間を要している。一年生ははじめての大きな合宿でたいへんであったろうが、もっと頑張っただろう。

[雪訓] 2日とった雪訓も、両日ともかなり遅くまでやったが、昨年に比べると、本峰アタックがあったのでやや不足気味。今年もタイトロープをやれなかったが、できればやっておきたいものだ。「初期制動」を重視した練習を行なったのはよかった。なお、一年生諸君は、次の反省事項を次の機会に活かしてほしい。「ピッケルストップは、雪が冷たい、手が痛い、等といったことの構わず思い切り突き刺さないと停まらない。「下降」(歩行)ができていないので練習せねば・・・」(坪井) 「歩行、ピッケルストップ(特に左)はまだ完全でなかった。ザイルワークは、自己脱出法(プルーヅック etc.)ができなかった。」(岩原)

[小縦走] 大失敗！ 主な原因は、岩原の足の皮がむけてしまったことにある。今後は、極力靴ずれを作らないようにする、初期のうちにテーピングして悪化を防ぐなど、注意してほしい。また、上級生が、一年生の実力を十分に把握していなかったとの反省もなされている。

[岩稜] 今合宿では、源治郎尾根とハツ峰という極めてオーソドックスなルートを選ぶ。

ハツ峰は、当初の予定では下半・上半を通して縦走する予定であったが、結局は分けることになった。I II 峰間ルンゼは I 峰など、かなり恐いところもある。V VI のコルへ下りる時、巻き道があるにもかかわらず、小野の判断ミスから、岩原に危険なクライミングダウンをさせてしまったことなど。重大な反省事項である。ルートファインディングは慎重に行う。また、「サブリーダーなどは、もっと慎重に危険を察知して適確な判断を下すべきだ」(井上)といった反省も出ている。上半は特に問題はなく、快適な岩稜歩きが楽しめた。

源治郎尾根は、2 年前より荒れていたように思う。特に取り付きのルンゼがひどかった。取り付きのルンゼ上部のガレ場は、早めに左側の尾根に上がったほうがよい。チョックストーンを持つ棚の通過にはザイルを出したが、この処理は評価されるべきであろう。

[岩登り] 本峰北壁および南壁の岩登りでは、天候判断がただしかったかどうか、大きな反省点である。霧、小雨のなかの岩登りとなった。たとえリードする上級生に自信があるのせよ、合宿では下級生もいることだから、安全第一にやるべきだ。個人山行とはある程度区別して考えるべきだ、という反省がなされる。(といっても個人山行ではムリをしてもよいという意味ではない)

また、特に南壁隊から、取り付きのラントクルフトのトラバースに関して危険性の指摘があった。取り付きのラントクルフトで滑落すれば非常なので、岩登りに行くときは、取り付きの雪渓を軽視せず、スノーフルーク等の雪上確保用装備をもって行くことを原則とすることを確認する。また、装備や実力との関連で、危ないと思ったら潔く敗退することの重要性も、指摘しておきたい。(なおこれは、今回の遭難事故についてもあてはまる重要な反省事項である)

VI 峰フェースは特に問題はないが、魚津高ルート隊が、意図に反してバリエーションルートに入ってしまったことは、反省を要する。

上級生岩登りのチンネ左稜線では、取り付きを探すのに約 1 時間を要した、取り付きを探す時間は短いに越したことはないが、取り付きを確実にすることは重要なことであり、時間の許すかぎり慎重にすべきであろう。また、プランニングの際には、取り付きを探すための時間を計算に入れておくべきであろう。この日は、朝から雷の兆候がみられたが、結局は大丈夫だった。途中から一緒になった社会人パーティーの人の話によると、まだ大丈夫ということだったが、雷の判断はなお研究を要すると思った。

[雪渓] 今合宿では、全般的に雪渓の処理を甘く見ているという反省がなされている。具体的には、一点目は、ラントクルフトの処理である。本峰南隊の行動(前述)は、下級生を連れていたにしても決して安全とは言い切れないものであり、また、最終日の中央ルンゼルートを取り付きのラントクルフトでは、取り返しの付かない遭難事故を起こしている。ラントクルフトを通過するときは、危険が予想されるときは無理をせずザイルを出す。そのためにはスルーフルーク等雪上確保用の装備を必ず携行していなければならない。

二点目は、急な雪渓の下降のときである。今回、長次郎雪渓上部等の傾斜の急なところでは、一年生の下降に際してザイルをフィックスしたが、支点はピッケルを差しただけであり、プルージックを利用して下りた。プルージックを下降時に使うことには問題がある。アップザイルンを行うか、また

一人一人確保して確実に下ろすべきであろう。もちろん、そのためには支点が確実にあることが条件である。やはりスノーフルーク等の装備を持っていくべきであろう。ピッケルを差しただけの支点では、支持力に限界があることをよく認識していなければならない。いずれにせよ、中途半端な支点はよくない。

また、今回、急な雪渓を下りる場合に、一年生の下に上級生が付く事があったが、これは多くの場合、気休め以上の意味を持たない。これがもとで大事故につながったケースもあるので注意すること。

[生活技術・その他] 合宿の重要な目的のひとつは、生活技術の体得である。今回、朝の準備において、一年生の遅れが目立った。山では時に一刻を争うことがあるため、個々の動作をテキパキとやることは大切である。慣れないうちはたいへんだが、趣旨を理解して遅れのないように努力してほしい。

(文責 小野)

12. 北アルプス鹿島槍ヶ岳北壁主稜

5月3日～5日

参加メンバー 浅沼(東大スキー山岳部OB)、鮎沢

ルート 天狗尾根～北壁主稜

3日 晴のち◎ 太谷原 7:00 ごろ～天狗の鼻 B.C.14:15

夜行列車の中で痛飲してしまい、何がどうなったのかわからぬまま、気が付くと大川沢左岸の道を歩いていた。北鎌に行く小野、井上両君をはじめ、多くの方々に迷惑をかけたらしく、情けないかぎりである。途中 2 時間ほど昼寝して酔いをさまし、雪少なくトレールバッチリの天狗尾根をヒタ登る。第1・2クーロワールとともにロープなし、見上げる北壁は黒々としてやる気をそぐのに十分である。

4日 ●

一日中雨で停滞。浅沼氏持参のゴア・ツェルトはフライ付きのエスパーよりもはるかに快適で、また昼間から大酒飲んでしまった。

5日 ○のち◎

B.C.5:00～主稜取り付き 6:10～北峰 11:00～B.C.12:30～大谷原 18:40

最低コルからのトラバースはかなり傾斜が恐い。主稜自体**ポロボロの岩をだましまし登る核心の 1 ピッチ以外は、ただただ消耗する雪壁登りに終始。予定では荒沢奥壁につなげるつもりだったが、壁の状態があまりに素敵し、もう酒もないので日和って下山する。3 月にまた来てみたいものである。

(文責 鮎沢)

13. 南アルプス甲斐駒ヶ岳 赤石沢前衛Aフランケ

5月26日～28日

参加メンバー 浅沼、鮎沢

ルート 毒蜘蛛ルート

26日 晴 竹字駒ヶ岳神社 5:25～Aフランケの頭(岩小屋)**:00～ルート偵察

今回は酒を飲んでおらず、ギアの詰まったザックが重いので、二人とも神妙な顔で黒戸尾根を登って行く。七合から上は残雪が多く、運動靴でのキックステップはしんどく冷たい。下半身がすっかり濡れてしまったので、2ピッチ fix の予定はとりやめて偵察に止める。幸い南面の故か、Aフランケへの下降路には雪はない。ルートを確認して岩小屋に戻ると、食糧がネズミらしきものに食い荒らされており、いきなり食糧制限となるが、酒とツマミは別だったので下りなくてすんだ。

27日 ◎ 岩小屋 4:30～毒蜘蛛ルート取り付け 6:30～終了 20:45～岩小屋 21:15

このルートの核心部は、3、4ピッチ目の**壁に走るネイリングだろう。小さめのロスト・アローとアングルの連打となり、慣れてくるまでは自分の打ったピンが信用できず恐ろしい。5ピッチ目から上もチップの見える浅打ちボルト、非常に不安定な草付き、風化して脆い岩に悩まされ、最後まで気が抜けない。でも核心のピッチをリードし終え、赤石沢本谷の大空間をバックにゆっくり上がってくる荷上げザックと空中ユマーリングするセカンドを見ていると、なかなかヨセミテチックで気分がよかった。

28日 雪のち◎

起きてみると、なんと外は雪ではないか！ [白い雪]ルートを登る予定だったが、念*も藤原雅一氏の拓いたルートを一本登れたので、満ち足りた気持ちで黒戸尾根を下る。

[使用ギア] フレンズ2セット、トリプル2ヶ、ロックス2セット、ナイフブレード2、3回、

ロストアロー(ショートショックを多用)、アングル(1/2～3/4を多用)

(文責 鮎沢)

14. 富士山吉田口

6月4日、5日

参加メンバー 鮎沢(単独)

ルート 吉田大沢

「サミット・フォール」で時期はずれのアイス・クライミングを楽しもうと思ってアイス・ギアを持ち上げたのに、金明水は全く凍っておらず、とうとうと滝となって流れ落ちているではないか！ お鉢回りをして下り始めると、下から運動靴のガキや外人のネエちゃんが続々と登って来てはげしく落ち込む。

(文責 鮎沢)

15. 奥秩父縦走(甲武信岳～小川山) & 小川山フリークライミング

6月18日、19日

参加メンバー 鮎沢(単独)

ルート 戸渡尾根～甲武信岳～小川山～廻目平

日本山岳会学生部の小川山集會に飛び入り参加する。ただ行くのもつまらないので、甲武信岳からカモシカ山行を試みる。夜道の一人歩きはコワイけど、金峰山の頂上で御来光を拝んだときは感無量だった。小川山では東大 OB の神沢さん、青学の小早志君、横国の加藤君に亀頭岩に連れていってもらい、ペンギンクラック(5.10a)、モアイクラック(5.9)を登った。ほうほうのていでピレイ点にたどりつき、汗ばんだ体を吹き上げる谷風にさらして新緑の山々を眺めるのはとても爽快だった。
(文責 鮎沢)

16. 東北周遊

7月1日、2日、3日

参加メンバー 鮎沢、仙台山岳会の皆様

ルート 黒伏山南壁(敗退)、蔵王山刈田岳、丸森の岩場

今年の正月の唐沢岳幕岩で知り合った仙台山岳会の皆様のお招きで、みちのくの山旅に出かけた。梅雨のまっ最中で太陽を一度も拝めなかったが、それでもあちこち移動して結構登った。彼の地のクライマーは、数こそ少ないけれど、ハード・フリーに対する取り組み方が非常に熱心で、レベルの高いのには恐れ入った。色々言われているが、「銀河計画」は決して伊達や酔狂ではないと知った。クライミングも地方の時代に突入しつつあるのであろうか。それはそれとして、玉こんにゃくの煮物、コノコ汁、長ナス漬等たいへんうまいものが多く、女子高生も可愛かった。結論、東北の山はイイ！！
(文責 鮎沢)

17. 黒部三部作

8月2日～8日

参加メンバー 鮎沢(単独)

ルート 黒部別山大タテガビン南東壁スラブ状ルンゼ～黒部丸山東壁(2ルンゼ下部、左岩稜フランケ Appendix)～剣岳八ツ峰北面滝ノ谷左壁どんぐり第一ルート～阿會原～樺平

2日 晴 1 ルンゼ押出右岸 B.C. 10:00～スラブ状ルンゼ取り付き 12:15～
南尾根 P5 のコル 15:10～B.C.17:30

夢の「黒部三部作」(別山～丸山～奥鐘山) 第一楽章は、大タテガビン南東壁ルラブ状ルンゼ。アプローチの南東壁沢の遡行も気の抜けないスラブが続く。スラブ状ルンゼは「Ⅲ 'AU」の 2m の垂壁までフリーノロし、ここでロープを出し、確保する。ピトンのききが悪く非常にいやらしい。源頭部の脆いスラブと草付きも悪い。さらに末端ルンゼの下降も神経をすり減らしものがあり、初日からへろへろになる。

3日 快晴 B.C.6:00～2ルンゼ取り付き 6:40～下部終了 12:45～B.C.14:30

2ルンゼのチムニーは苔むしているか。ナダレで磨かれてツルツルか、のどちらかでとても滑りやすい。AOしまくり、テラスや緩傾斜帯にたまった浮石がコワイ。核心部は4ピッチ目のルンゼ右壁～振り子～左壁の部分。よいホールドがなく、フリーは微妙で、振り子も常に壁を蹴ってられないのでややムズカシイ。

4日 晴のち● B.C.8:00～Appendix 取り付き 7:30～終了 18:30～B.C.17:30

いま山行のヤマ。第二楽章丸山のフィナーレ。「Appendix」に「やめようやめよう」と思いながら取り付いてしまう。ラインは明瞭で、ポツポツと残された支点の間をネイリングやナッツ類をセットしてノロノロと進む。1P目、20mほど登ったあたりで、フレンズ#11/2をかませた岩が欠けて落ち、下のボルトで止まる。ロープの伸びを含めて6mくらい落ちたので、やはりA2と言えるか。2P目はコーナーおネイリングからフレンズでのトラバースで、易しい。3P目、カンテを回りこんだフェースのクラックは切れぎれで浅くフレアーしているというシロモノ。ナイフブレードやアングルのタイ・オフの連続で、やっとこさ白いクラックに入第一り、大きめのフレンズのかけかえで直上。最後のスラブ状フェースで2回スカイ・フックをかけた所で完全に行き詰まる。目***岩肌を**回し、弱点を探すが、時間だけ無常に過ぎ、太陽は沈み、おまけに雨まで降ってきた。もう疲労と緊張でモラルなどどうでもよくなり、疲れ切った腕でドリリングを始め、チップの見える浅打ちボルトを3本連打する。木登りの4P目を暗くなりかけた頃終えて、3回のラップルで基部に戻る。ロープをたたむのにも息が切れ、重いザックにフラフラしながらB.C.に戻り、内蔵助谷の水をむさぼり飲んで、そのままテントに入り眠り込む。あのボルトが、後にあれほど『岩と雪』誌上でひんしゆくを買おうとは・・・

[使用ギア] フレンズ(1/2～4) 1セット、ロックス 1セット、ナイフブレード 5、
アングル(短めを多用)、ロストアロー(短めを多用)、スカイフック 2
そしてボルト3・・・ “うっ”

5日 ●ときどき◎ 丸山1ルンゼ押出右岸 7:30～ハシゴ谷乗越 10:53～真砂沢 13:00

真砂沢で合宿中の現役のテントへの移動。テントには彼らの姿はなく、ロングランにでかけたものらしい。コゴミとイタドリを摘んでささやかながら楽しい夕げをとり、休養する。

6日 ◎ 真砂沢 4:30～滝ノ谷左俣どんぐり第一ルート取り付き 6:25～

(7P目途中から敗退)～取り付き 12:45～真砂沢 14:30

二俣から1時間ほど三ノ窓雪渓を登ると、滝ノ谷出合の立派な滝が見えてくる。ラントクルフトをおそろおそろまたいで登攀開始。2P目のきれいなコーナー・クラックだが、*れているのでフレン

ズとアングルのエイドで行く。4P 目のバンドのトラバースはス*アリングのみで緊張するがおもしろい。上部壁がヌレヌレで、中間バンドから 2 ピッチ登った所で苔むしたスラブにイヤ気がさし、あっさり敗退に決める。5 回のラッパルで取り付きへ。真砂に戻ると、現役連中が帰っており、酒宴をやり、酔った勢いで素裸になってお立ち台に上り、芸をやってしまった。失礼しました。

7 日 ◎ときどき晴れ 真砂沢 5:10～八ツ峰VI峰Cフェース剣稜会ルート取り付き 7:00～
終了 10:00 頃～真砂沢 12:00

新入部員の子供こどもした坪井君とCフェースに行く。岩は快適だが、人の多さにムッてしまう。同じ八ツ峰の向こう側には、滝ノ谷や袖ノ谷などもっとすばらしい壁があるというのに……。夜はお別れの酒宴をやる。

8 日 晴のち● 真砂沢 6:00～仙人池 9:30～阿曾原 12:00～樺平 16:00

いよいよ「最終楽章」奥鐘山へ出発。初めて仙人池から剣を見たが、出来すぎる位に絵になっていた。水平歩道のはじめは決して水平でなく、怒る。奥鐘山西壁は初見参なのだが、足元から黒部川まで一気に落ち込む高度感と、ハングの張り出しのデカさにビビリまくる。河原通しのアプローチをするつもりで樺平まで行ったら、ごったがえす観光客の毒気にあてられて里心がつき、ビールを飲んだら、「もうダメ」という感じで、最終のトロッコに飛び乗ってしまったのであります。いつも最後がしめられず、情けないかぎりであります。

[追記]

「黒部三部作」成らず、帰京してヤケ酒ばかり飲んでいたある日、後輩の細野伸二君が剣での合宿中に遭難死、との悲報が届いた。さらに追い打ちをかけるように、今山行中、丸山でおいしい紅茶を何杯もごちそうしてくれた白井秀明氏(RCC神奈川)が。大タテガビンへのアプローチで落石を受けて死亡したとの知らせ……。信じられなかった。二人とも別れる時は、最高にイイ笑顔を見せてくれたのに……。山の非情さに打ちのめされ、それでも山に登り続けるであろう自分のことを思うと、山登りの世界の因果さについて考えないわけにはいけなかった。今はただ、二人の瞑福を祈るのみ。合掌。

(文責 鮎沢)

..... **Free Talk**

ボルトをボトルに持ちかえて

———— **ボルトをめぐる断章** ————

by 鮎沢 政文

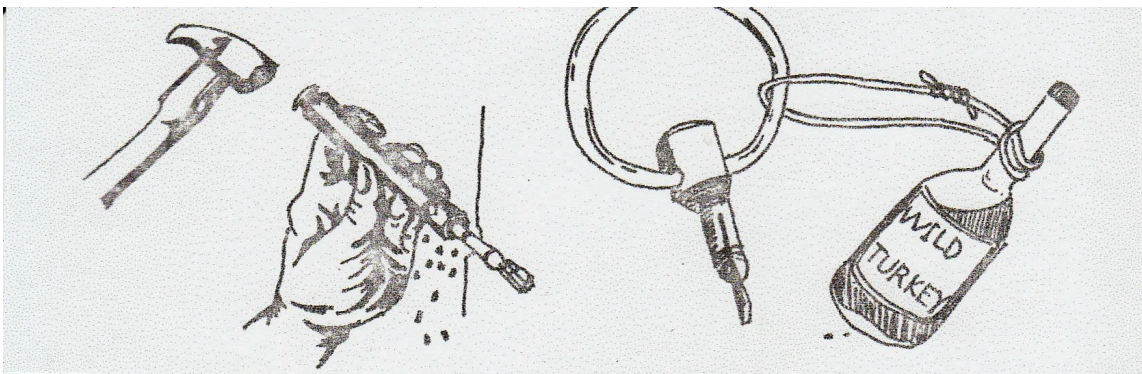
8 月に黒部丸山東壁左岩稜フランケ Appendix を一人で登った、今年の 5 月に星稜登高会の野、園呉は中氏、秋山氏らが拓いたアメリカン・エイドのルートである。3 ピッチ目でビレイの巨木を目前にして行き詰まり、ボルトを 3 本打ち足した。下りてきた時は、「やっぱりまずかったかな」と激しく後悔したが、その後はあまり気にとめずにいた。そこへ今月号の『岩と雪』が出た。あのボルト 3 本

を打ち足した行為が厳しく批判されているではないか！ まさに「大タテガビーン」であった(ガビーンで足りない位の驚きに対してこう言う)。

アメリカン・エイドの本来の意味を、そして日本の岩場を「残置ピトン・ファインディング」から救い出して再生させようと努力している人たちの真摯な姿勢を考えると、あのドリリングは単なる売名行為か蛮行と受けとめられても仕方ないと思う。彼らの批判は手放しで受け入れ、近いうちにあのボルトは回収しに行くつもりである。謙虚なのである。

しかし、ボルトをボトルに持ちかえて酔いに身を任せていると、急に強気になって何事かを言わずにいられなくなる。傲慢なのである。

何を行っても恥の上塗りにしかならないことはわかっているが、それでも言ってしまう。やけっぴちなのである。



◎「エクспанジョン・ボルトが普及するとともに……登山の非予測性はほとんど完全に消え、従って挑戦の要素も無くなり、『不可能』という言葉の意味さえ登山から消え去った……登山の精神は崩壊したのだ。理由もないのにボルトを使うものだから、登山はただ粗野で野蛮なものになった」。ポナッティ『わが山々へ』

……あまりの正論に返す言葉もないが、あえて言わせてもらえば、理由もなく打たれたボルトなどないと思う。一本のボルトは一つのドラマを語っている。詩人なのである。

◎「クライマーの中には、既存ルートの登攀にあたり望みが能力を上回っている者がいて、自由登攀や普通の人工登攀がききなくなるとボルトを使う。初登攀者ほそこでボルトを使わなかったのに、こいたクライマーは、いったん引き返して技術を習得してから出直してくることを考えないらしい」ダグ・スコット『Big Wall Climing』

……まさに私のことではないか！ でもビレイ点を目前にしながらいったん東京まで引き返すのは大変だ。ものぐさなのである。

◎「トランゴの時は前進用に打ったボルトは一本だけだった。いまでもこの一本が悔やまれる。だがトランゴの頂上岩壁を登り終え、頂上に達した時、その満足感は最高潮に達した。それは自己満足かもしれないが、しょせんマスターベーションの世界……どうせやるなら立派なマスターベーションをしたいものだ」。星稜・野中氏『CJ』 37

……そう言われてみれば、マスターベーションにもフリー(いわゆる自己発電ですね)と人工(いわゆる大人のオモチャですね)があると気づいた。しかしいずれにせよ、行為の後の虚しさは変わ

らないと思うのだが……経験者は語るのである。

◎「ぼくだったら再登の時、ボルトを打って突破などまずしないと思う。落ちてもいいからやってみる。それでもだめならパートナーとトップを交替するし、単独だったら何とか敗退する。何が何でものぼるという気力は大切だと思うが、初登者が何とか越えたところを、ボルトを打ってまで突破したくない」。星稜・秋山氏 『岩と雪』 131

……「～しないで欲しい」と言われるとしたくなるのが人間である。そんなことを言うと打つぞ！
ほとんどガキなのである。

Yosemite Dairy '88

by Masafumi Aizawa

私はこの9月から10月にかけて、アメリカ合衆国はカリフォルニア州のヨセミテ国立公園を訪れ、彼の地のクライミングを体験して参りました。ヨセミテ・クライミングに関する詳しい情報については他のガイド類に任せるとして、今回は簡単な日記形式により、向こうのキャンプ生活やクライミングの雰囲気といったものを伝えるべく努力してみたいと思います。ヨセミテに興味を抱いている大学山岳部の皆様の参考になれば幸いです。

9月6日 ○ (日中猛暑)

ヨセミテ入り。バスの窓から初めてエル・キャップと御対面したときは、自分がこれからアレを登るといことがとれも信じられなかった。サニーサイド・キャンプ場で、\$2.00/人・日×7日(6/1~9/15の間のキャンプ期間、これを越えると\$25の罰金)のテント登録をすませ、同じテントの日本のクライマーに声をかけて「ザ・クッキー・クリフ」というエリアに連れていってもらおう。サニーサイドから10kmも離れているので、車でないと行けないが、垂直のクラックが集中した人気のエリアだそう。 「アナセマ」という5.10bのシン・ハンドのクラックを苦勞してフォローする。時差ボケもあって疲れ果てて帰り、サニーサイド近くのヨセミテ・ロッジのストアでパンと缶詰を買って詰め込み、早々に寝る。初日から慌ただしすぎたようだ。

9月11日 ○ (日中猛暑)

一つには英会話が不自由なせいもあって、何をするにもおっかなびっくりだったキャンプ生活もようやく慣れ、クライミングに専念できるようになってきた。明るくなりかけた7時頃に起き、エル・キャップメドウまでランニングしてストレッチをやってから、パンとコーヒーで朝食。こちらの食パンはやすくて種類も色々あって大変おいしい。親しくなった日本のクライマーと相談し、「ヨセミテに来たらやっぱりクラック」ということで、また「クッキー」に行く。フィンガーの「キャッチー」(5.10d)、ワイドの「ミート・グライNDER」(5.9 ←はっきり言ってヨセミテのワイド系は恐怖!)、ハンドの「アウター・リミッツ」(5.10b)とたて続けに登ると前腕はパンプして棒のようになり、指の皮はボロボロになる。「クッキー」のクラックは傾斜がきついので、ジャミングにごまかしが効かないし、確実なチョック・ワークが要求されて、とても勉強になる。夜は同じテント・サイトの者で炭火を囲み、「トルティーヤ」というメキシコのとうもろこしのチップスに、「サルサ」というとれも辛いティップをつけて、ライトビール

を飲みながら歓談(ショート・ルートを登る日はいつも大体こんな感じである)。

9月14日 晴

アメリカの大学生の誘いで、センチネル・ロック北壁のV級ルート(通常1ピバーク)「シュイナード・ハーバード」ルートのワン・デイ・アセントに挑戦。センチネルはマーセド河をはさんでちょうどサニー・サイドの対岸にあり、高距 500m ほど。ちょっとパタゴニアのフィッツ・ロイに似ていて気になっていた壁だ。まだまっ暗な AM5:00 にキャンプ場発。アプローチのハイキングコースを駆け足し、クラスの岩場をノー・ロープでとばし、AM7:30 に登攀開始。ピッチ・グレードは 5. 9A2 で、オール・フリーだと 5. 11c、5. 10c まではフリーでリードするが、それ以上はエイド。一連のルーフ越えは、やや岩がルーズで、高度感と相俟ってひたすら怖い。暗くなった PM7:30 に頂上着。ヘッド・ライトつけて、滝谷C沢のようなガリーを1回のラッペルを交えて駆け下り、PM10:30 にテント着。心配していたコミュニケーションも、クライマー同士、なんとかなり、充実した一日を終える。

9月22日 ○

9/19, 20 とM氏とエル・キャップの「ザ・ノーズ」にトライしたが、先行パーティーが多く、時間切れのため、17P から敗退した。M氏の帰国後、同じテント・サイトのW氏と話がまとまり、再トライすることにした。今日は準備にあて、シャトル・バス(無料)で公園内を駆け回る。マウンテン・ショップでギアの買い足し、レンヤー・オフィスに計画届け出(これをやっておくと、何かの時に無料で救助活動が受けられる)、最後にビレッジ・ストアで食糧買い出し。パッキングの後は食いだめということで、好きなだけバドワイザー(一缶\$0.68)を飲んで、巨大なサーロイン・チップ・ステーキ(それでも\$2.00しない)を焼く。

9月23日 ○

「ザ・ノーズ」の「シッケル・レッジ」まで4本のロープをフィックスし、水(2人×4日分で16ℓ)と食糧(パン、ラーメン、くだもの缶)をデポ。

9月24日 ○

「テキサス・フレーク」(16P)下のテラスでピバーク。順調に進んだが、荷上げとクリーニングはしんどく、まさに“垂直の土方”。疲れ果て、夕食をとると、快適なテラスでコテンと寝てしまう。

9月25日 ○

「キャンプ5」(25P)でピバーク。複雑な振り子があったのと、ナッツの人工が多かったのとで時間を食い、暗闇の中、フレンズのカムが効いているのがわからぬままに、アブミをかけかえてキャンプ5へ。外傾した小便臭いテラスだが、そんなことにお構いなく急降下で眠りに落ちる。

9月26日 曇

次々に現れる均一サイズのクラックをフレンズのかけかえで登り、ボルト連打のファイナル・オーバー・ハングを越えると、真っ平な頂上台地の一角に飛び出て、37ピッチに及ぶ垂直の土方作業を終える。イーシト・レッジ経由の下降路(途中で3回のラッペルがあり)は初めてだし、暗くなりそうなので、頂上回りのハイキング・コースを重荷にへろへろになって下り、4時間の苦行で懐かしのサニーサイドへ。何はともあれビール、ビール。生きていてよかった!

9月27日

休養日。体お節々が痛く、手の指はむくんで傷だらけでタラコのように。陽が高くなってから起き出し、ギア分けをした後、ハウスキーピング・ビレッジに行ってシャワー（石鹸、タオル付きで\$1.5）を浴び、コインランドリーで洗濯（\$1.00）をする。用事を終えて一息つくと、反動食いが始まり、キング・サイズのスニッカー、トルティーヤ、バドワイザー、バカデカステーキ、クッキーと食いまくり飲みまくり、腹パンパンにして寝てしまう。（こういうだらけきった生活が2、3日続き、体が重くなり、当然ショート・ルートには行かなくなり、ビッグ・ウォールにしか喜びが感じられない異常な体になってゆく。これをビッグ・ウォール・シンドロームという）

10月13日

「ザ・ノーズ」の後、W氏とエル・キャップの南東壁を代表するエイド・ルート「ソディアック」に取り付いたが、8P目で私が2回墮ちてビビリ、あえなく敗退した。W氏はさびしく帰国し、ハネムーンでやってきて必ずルートの終了点でビバークし、「若い二人に下手な詮索は無用だ」と日本のクラーマーを羨ましがらせた東大スキー山岳部 OB のK夫妻も、サンタモニカに行くとかで、ニコニコしながら出発してしまった。キャンプ場お掲示板に「Partner wanted for “Zodias”」の掲示を出してから数日たつが、いまだ反応はない。クライマーが少なくなって閑散としたテント・サイトで昼間からビールを飲んでゴロゴロし、夜は夜で、日本に帰ったら絶対食えないというだけの理由でバカデカステーキを焼く。同じテント・サイトのスイス嬢に「always eating or sleeping」と言われて激しく落ち込むが、日本人笑いで辛うじてごまかす。ヨセミテに来た頃の、ショート・ルートに打ち込んでいたストイックな日々が懐かしい……。

10月15日 ○（日中暑い）

*****以下、原本なし*****